日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野　正博

海に竹を生かす

波静かな入り江に浮かぶカキや真珠の筏（いかだ）は日本の原風景と、言いたい所ですが、いま使われている竹製の養殖筏が普及したのは昭和30年代。それでも半世紀に渡って見慣れた景色ですから、平和な里海の象徴といえるでしょう。

さて、1台の筏にはおよそ100本くらいの太い竹が使われます。カキどころの広島湾などには1カ所に1万台以上の筏がありますから、日本中で使われている竹は1千万本以上。養殖筏は里山にはびこる厄介者の最大の利用先なのです。

この筏の竹が最近、徐々にプラスチックパイプに置き換わっています。竹製筏の寿命はせいぜい5年。プラスチックパイプの耐久性には太刀打ちできません。さらにダイオキシン問題で廃棄物の野焼きが原則禁止になり、使い終わった竹製筏の処分が難しくなったことがプラスチックパイプ採用に追い風となっています。

農林水産業で発生した木や竹の廃棄物は野焼きしてもかまわないのですが、大量に発生する煙がはた迷惑なのも確かですから、仕方がないかなって気もしますね。

でも、ちょっと待ってください。竹はそこらの山にいくらでも生えてる上に、その伐採は里山の保全にとても大切です。おまけに、空気中の炭酸ガスを吸収して育った植物そのものなので、使用済みを燃やしても炭酸ガスの増加にはなりません。つまり、竹の利用は環境にとても優しいのです。

石油を原料にしたプラスチックは、製造から処分に至る間にたくさんの有害物質を生み出します。おまけに今世紀のうちには石油を掘り尽くしてしまうだろうと心配されています。環境に優しくない上に原料の先行きも怪しいのですから、こんな物を使うのは愚の骨頂。

カキどころの広島湾では、使用済みの竹製筏を炭にして処分する工場を大きな艀（はしけ）の上に載せた浮かぶ処理工場計画が進められています。12×25㍍もある筏を処理工場に運ぶのは大変なので、処理工場の方が津々浦々を回ろうっていう面白い計画です。まだ、紙上の計画ですが、竹製筏の需要を確保するために是非とも実現させてほしいものです。

海上保安学校沖に浮かぶ真珠養殖筏